

発行日
令和6年1月5日
編集・発行
春日井市道風記念館
春日井市松河戸町5-9-3
電話 0568-82-6110

道風記念館だより

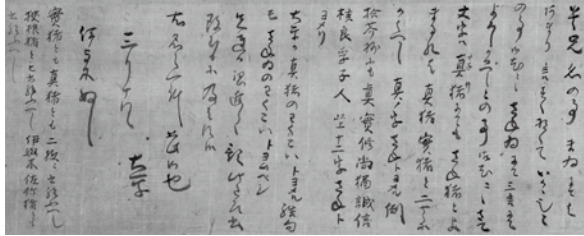
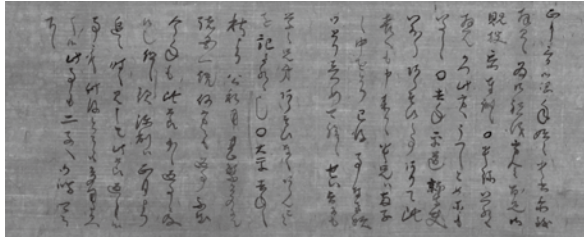
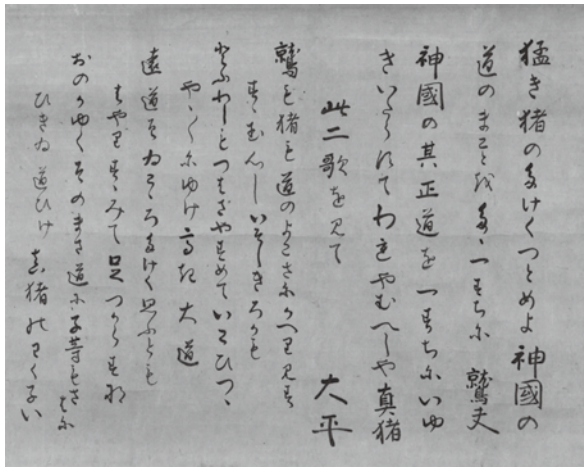
第69号

とうふう
道風

収蔵品紹介 本居大平書簡

一幅 江戸時代（二九世紀）

本居大平（一七五六～一八三三）は江戸時代後期の国学者。伊勢松坂の商家に生まれ、一三歳で本居宣長に入門、四四歳のときに宣長の養子になりました。宣長没後、長男の春庭が失明していたので大平が本居家を継ぎ、宣長学を継承しました。宣長の後を受けて和歌山藩に出仕、のち和歌山に移住しました。国学に大きな業績を残したわけではありませんが、大平の優れた人格を慕う者は多く、千人を超える門人を育てました。大平五〇歳ころの同時期に書かれた三通の書簡が



上 320×405mm、中 163×405mm、下 163×405mm

一幅に仕立てられています。料紙は色違いの染紙です。第一通は土佐の門人、大倉鷲夫（一七八〇～一八五〇）と伊与木真猪あてです。新しく門人になった真猪を激励する先輩の鷲夫と、決意を述べる真猪の歌に対して大平が歌で答えています。末尾の「わく子」とは「若い人」の意で、真猪が若い門人であるとわかります。

第二通の受取人は不明ですが、土佐の門人の中心的存在である人であろうと、書簡の内容から想像できます。年始のご祝儀に対する礼を述べ、門人の武藤平道（一七七八～一八三〇）と大倉鷲夫との間で争いがあつた際にその仲裁をしたことをねぎらい、多忙のため手紙の返事や歌の添削ができないことを詫びています。

第三通は伊与木真猪あてです。大平が真猪という号を付けたところ「まぬ」では短くて変だと言うので、「まぬ」ではなく「さねぬ」と読むのである、「実猪」や「狭根猪」「佐称猪」と書いても良い、と教える内容です。

三通とも、門人たちに対する大平の温かい心が伝わってくるような書簡です。

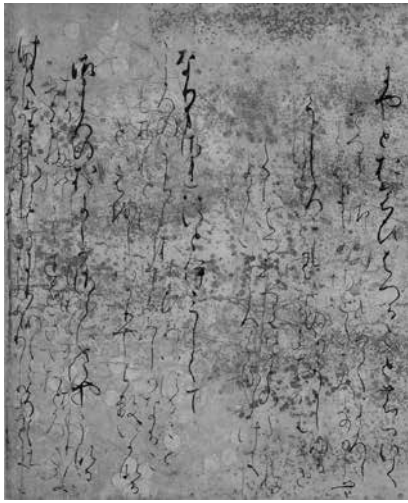
国宝「源氏物語絵巻」の

詞書の書と料紙装飾

四辻 秀紀

昨年の「どうする家康」に続き、今年は「光る君へ」が大河ドラマとして取り上げられ、本誌が皆さんのお手元に届くころにはすでに放映が始まっていることと思います。

その大河ドラマの主役はご存じの通り紫式部です。紫式部は藤原為時（生歿年未詳）の娘で、堤中納言の名で知られる藤原兼輔の曾孫にあたります。紫式部が『源氏物語』を書き始めたのは、式部の夫藤原宣孝が長保三年（一〇〇一）に歿して間もない頃から、寛弘二年（一〇〇五）あるいは翌三年の十二月二十九日に中宮彰子（九八八〜一〇七四）のもとに出仕するまでの寛居の時期と考えられています。『紫式部日記』の記事から、その三年後には人間のドラマや歴史を呈するほど



第一類 「柏木(二)」(部分)

に書き進められていたと考えられています。

その後写し継がれ読み継がれていった『源氏物語』は、堀河天皇（一〇七九〜一一〇七）の康和年間（一一〇九〜一一一三）頃から広く流布し、広く享受されるようになっていきました。成立の段階から元本・浄書本・草稿本の存在が知られ、その後の転写の過程でさまざまな異本が生じていき、紫式部が執筆した当初の姿が明確でなくなってきました。そのため鎌倉時代に入ってから藤原定家（一一六二〜一二四一）が校訂した青表紙本、源光行（一一六三〜一二四四）・親行（生歿年未詳）父子の校訂になる河内本によって整えられていきました。

さて本稿で取り上げる国宝「源氏物語絵巻」（徳川美術館・五島美術館蔵）は、『源氏物語』を抒情的な画面の中に描き出した絵巻として著名な作品です。この絵巻の詞書本文は抄出文であるにせよ『源氏物語』の本文としては最も古く、現在私たちが活字で読むことのできる青表紙本系統本や鎌倉時代から南北朝時代に流布した河内本両系統本以前の本文形態をとどめており、国文学的にも貴重な存在となっています。

『源氏物語』の絵画化は、その成立当初間もない頃からおこなわれていたとみられています。これらも伝わらず、本絵巻は現存する作例としてもっとも古く、十二世紀前半に白河院・鳥羽院を中心とした宮廷サロンで製作されたと考えられています。

当初は『源氏物語』全帖を一具として絵画化が試みられていたとされますが、現在、尾張徳川家伝来の蓬生、関屋、絵合、柏木一〜三、横笛、竹河一・二、橋姫、早蕨、宿木一〜三、東屋一・二の

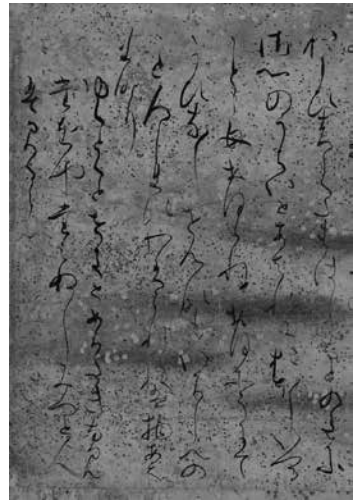
九帖十五段分の詞書と絵、および絵が失われ詞書のみが残る絵合の一段が名古屋・徳川美術館（現在は保存のため十五巻の巻物に改装）に、阿波・蜂須賀家に伝来した鈴虫一・二、夕霧、御法の三帖四段分の詞書と絵が東京・五島美術館に所蔵されており、これらを合わせても十三帖分だけで、さらに諸家に分蔵される詞書の数行の断簡を含めても二十帖分が知られているに過ぎません。

詞書・絵ともに現存する十九段のうち十一段は詞書中に和歌を含み、さらにこのうち六段は登場人物間にかわされた贈答歌を中心に場面が選ばれています。これは単にストーリーのみを図示したのではなく、和歌を絵画化した「歌絵」と呼ばれた小品画の伝統をふまえ、優美な料紙に流暢な筆致でしたためられた詞書がいままで、物語の抒情性や登場人物の心理の動きまでも巧みに描き出されています。

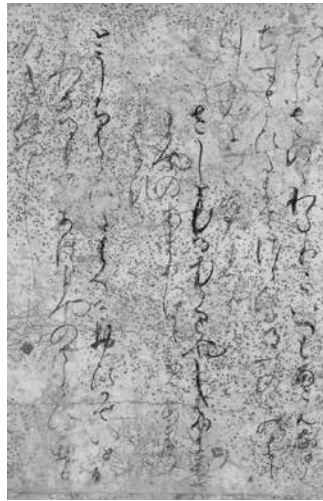
本絵巻の詞書について見ていきましょう。筆跡は次のように分類されています。

- 第一類 柏木・横笛・鈴虫・夕霧・御法、
- 第二類 蓬生・関屋・絵合、
- 第三類 早蕨・宿木・東屋、
- 第四類 竹河・橋姫、

このうち第一類の書風は、十一世紀以来の伝統を引き継ぐ美しい連綿体で書きつづられ、時には重ね書きや段落としたり技巧的な書法を駆使して書写され、本絵巻中最も優れた「手書き」によって染筆されたとみられます。第二類に分類される書風は、部分的に側筆を交えながらのびやかで風格のある筆致、第三類は行間のゆとりが少なく、



第二类 「関屋」(部分)



第三類 「東屋(二)」(部分)



第四類 「橋姫」(部分)

筆を細かく運ぶ特徴があり、伝統的なスタイルを示しつつ新しい感覚が看取できる書風、第四類は自由奔放で肥瘦にとみ、摂政・関白であった藤原忠通(一〇九七〜一一六四)にはじまる側筆の濃厚で力強い法性寺流の書風が示されています。忠通は、漢字にも仮名にも優れた書き手で、その書風は当時の感覚として「今めかしき(現代風)」と受け止められていました。いずれにせよ本絵巻には新旧の書の様式が混在しており、十二世紀前半の書風の享受の様子がうかがわれます。

これらの多様な書風と呼応するように、詞書に使用された料紙にも当時の王朝人の美意識が反映されています。縦約二十二センチ、横約二十四センチを必要に応じて繋ぎ合わせた本絵巻の料紙の装飾は、各紙ごとに濃淡さまざまな紫や蘇芳などの色調、あるいは村濃染めを交えつつ、さらにその上に金銀の砂子・切箔・野毛散らしなどの美麗な装飾が凝らされており、絵・書とが一体となって展開しています。

またいくつかの詞書冒頭に配された装飾——例えば「関屋」の紅葉の色々をこきませた逢坂山の風情を、「夕霧」の霧深い小野の里を想起させるかのような絵画的空間——は、各場面の情趣をより深める効果をあげています。

さて「源氏物語絵巻」の料紙装飾の中心となる金銀箔散らしについて、その歴史を歴史を簡単に紹介しておきましょう。金銀箔散らしのうち、砂子は、竹筒の一端に目の細かい網を張り、揉箔(金や銀の箔を揉み砕いたもの)を入れて篩い、響砂をひいた紙の上に撒く手法です。奈良時代から行われていた砂子撒き(微細な砂子で金銀塵紙と呼ばれる)は平安時代に受け継がれ、十一世紀中頃までの成立とされる「大字和漢朗詠集切」や「金

砂子万葉集切」(いずれも諸家分蔵)などに、微細な砂子を料紙全面に均一に撒く手法の遺例が知られ、十一世紀後半頃からは、ややの大ぶりの砂子も見受けられるようになります。一一一二年頃の成立とみなされている「本願寺本三十六人家集」では、それまで受け継がれてきた揉箔砂子とともに、箔を一〜二ミリ角ほどに細かく切って散らす切箔砂子の両手法が用いられています。揉箔砂子よりも手間がかかりますが、それ以降長らく揉箔砂子は影を潜めてしまいます。「本願寺本三十六人家集」には、四角のほか、長方形・三角形・菱形・短冊形・野毛・裂箔と多様な形状の切箔が用いられています。元永三年(一一二〇)の国宝「元永本古今和歌集」(東京国立博物館蔵)では、切箔の種類が整理され、砂子や四角形の切箔・野毛のみに集約されていきます。

また「源氏物語絵巻」詞書に用いられているような、金銀の微細な粉(泥ではなく絵皿に揉箔砂子と膠水を入れ指先で丹念に練ったもの)を雲霞状に撒いたり、大中小などの大きさの違う四角形の切箔や野毛を大きさごとにまとまりをつけて撒き分ける手法は「本願寺本三十六人家集」には全く見られず、一一二〇年の「元永本古今和歌集」に萌芽的な傾向が窺えますが、これより後の重要文化財「是則集」(静嘉堂文库美術館蔵)や一一四二年頃に成立した国宝「久能寺経」(鉄舟寺ほか蔵)に多く見受けられます。さらに「源氏物語絵巻」の「御法」や「宿木二」の詞書にみられるような金銀砂子を型置き・型抜きで図様をあらわす手法、「蓬生」第四紙の例では金銀切箔散らしの上に波模様の雲母摺りしており、こうした手法はやはり「本願寺本三十六人家集」をはじめと

館蔵品展「書に想いをのせる」

する十二世紀初期の作品には用いられておらず、「久能寺経・化城喻品」（鉄舟寺蔵）に使用例があります。蛇足になりますが、紙面全体に均一な染め色をほどこす染紙に加え、村濃染や暈かし染の用例がみられるようになるのも遺例から十二世紀初頭からです。

したがって十二世紀初頭から数十年の間で切箔散らしの手法が変化を遂げ進展していったと考えられるのです。昨年紹介した「八幡切麗花集」や「本阿弥切古今和歌集」のように十一世紀から受け継がれてきた料紙に対する美意識は、一一二〇〜三〇年頃を境に、古代的色合いの濃い美に対する意識から脱却し、新たな感性に裏付けられた美意識を指向するようになっていったと考えられます。

十一世紀以来の伝統的な行成様に代表される和様の優美な書のスタイルが、十二世紀になって、忠通にはじまる法性寺流へと移行していき、それが当時「今めかしき」書風として享受されていた点と歩調を合わせたかのように、料紙の装飾に対しても趣向が変遷していったのです。国宝「源氏物語絵巻」の成立年代もおそらく、この美意識の交換期から間もない頃に製作されたと考えられます。

（名古屋経済大学特別教授 よつつじ ひでき）

徳川美術館第6展示室「王朝の華―源氏物語絵巻―」では常時複製と映像で源氏物語絵巻を鑑賞できます。

徳川美術館

名古屋市中区徳川町 TEL 052-935-2173

開催中の展覧会

企画展「つるわしの古筆」令和6年1月4日〜1月28日

展示品作者一覧

【前期】伊藤東涯／龍草蘆／浅野醒堂／藤澤南岳／阪正臣／坪内逍遙／千葉胤明／比田井天来／野口雨情／川谷尚亭／鈴木翠軒／田中真洲／桑原翠邦／藤田蒼碩／藤田東谷／坪井正庵／堀田翠堂／浅野啓道／小松茂美／稻垣松圃／村上翠亭／桑原呂翁／山川昌泉／平田蘭石／大石三世子／太田海軒

【後期】荻生徂徠／本居大平／日下部鳴鶴／永坂石埭／伊勢門水／小野鷲堂／加藤義清／清水比庵／荻原井泉水／佐分移山／林楽園／伊藤東海／石橋犀水／田中塊堂／井上桂園／岡本白濤／久野麦銭／小島碧雲／日比野光鳳／黒野清宇／高木大宇／野崎幽谷／高田香坡／岡本苔泉／近藤浩平／松本大鷲

―伝えたい想いがある。だから筆をとる。―

書作品には作者の強い想いが込められています。書かれる内容は、作者自身の想いを語る言葉であったり、作者が深く共感した詩人・歌人の詩歌であったりします。今回の展覧会「書に想いをのせる」では、道風記念館所蔵の近現代書作品のなか

でも特に作者の想いが鑑賞者の心に鮮やかに伝わってくるような作品を選びました。前期、後期で全ての展示品を入れ替え、あわせて52点の書作品をご紹介します。

本号表紙でご紹介した本居大平書簡も後期展で展示します。ぜひご鑑賞ください。

展示品解説

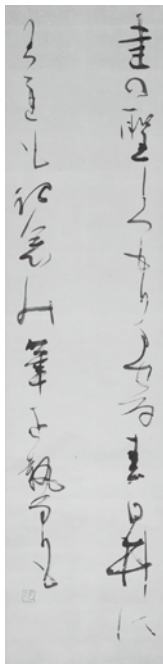
【前期】12月16日(土)・1月21日(日)

【後期】3月16日(土)・4月14日(日)

各日 10時半〜11時、14時〜14時半

学芸員が初心者向けに展示品の解説をします。事前予約は不要です。

お気軽にお越しください。



田中塊堂（二八九六〜一九七六）

「書の聖しづもりませる春日井にわれも記念の筆を執るかも」春日井には小野道風の誕生伝説があり、毎年道風をまつる道風祭が催行されます。この作品は道風祭に寄せて田中塊堂が歌を詠み、したためたものです。



坪内逍遙（二八五九〜一九三五）

「むかう通るは清十郎ぢやないか笠がよく似たすがさが」劇作家でもあった坪内逍遙は舞踊劇「お夏狂乱」を制作しています。発狂し清十郎を探し求めるお夏の姿も逍遙によって描かれています。